

第十三回熊本大学附属図書館特殊資料展

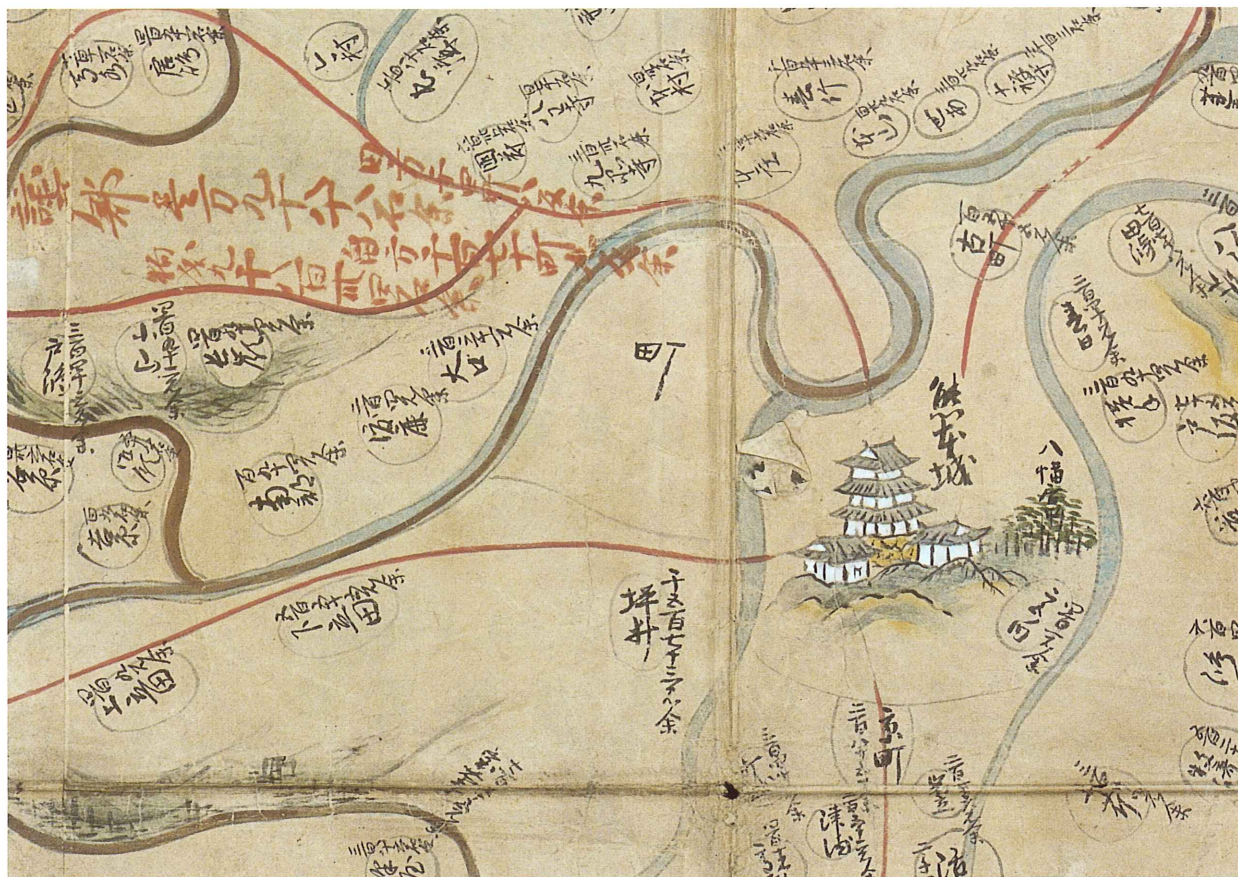
「**絵図でみる細川氏の領国支配**」

【出品目録】

平成8年11月2日～11月4日
熊本大学附属図書館

公 開 講 演 会

講 師	熊本大学文学部教授 松 本 寿三郎 氏
演 題	「絵図でみる細川氏の領国支配」
日 時	平成8年11月2日（土） 13：30～15：00
場 所	附属図書館会議室



慶長国絵図(部分)

1. 慶長国絵図

整理番号 8.4.98 丙

将軍徳川家康は慶長9年諸大名に命じて諸国の国絵図と郷村帳(御前帳)を提出させた。全国を手の内に把握しようという意図があったものであろう。スケールは1里を4寸(約12センチ)に統一している。郡別高を記し、村名と村高は楕円形のなかに、主な街道を朱で描き一里木の記載はない。川、海岸、山、のほかに、熊本城・八代城(麦島城)のほか、宇土城・関城・内牧城・矢部城・富岡城・人吉城・湯前城など慶長期の城郭を書き上げている。球磨郡は相良氏、天草郡は寺沢氏の所領であったが、加藤清正が球磨・天草のデータの提供を受けて作成したものである。この絵図は慶長国絵図の写しと考えられる。この絵図は細川氏が入国直後寛永10年(1633)の諸国巡見使の接待のために幕府の絵図を写したものといわれ幅1間2尺余(2.48メートル)長さ1間3尺余(2.745メートル)。巡見使の道程、宿泊、休憩所などに貼り紙している。

2. 元禄国絵図

整理番号 8.4.1.甲

幕府は元禄9年(1696)11月国絵図の改定を指示した、肥後国絵図は熊本藩が担当することとなり、先年差し出した正保3年の絵図控え、郷帳を参考にした。絵図の書き様は前回とおなじだが、郡単位に分割して郡奉行が中心となって、論地・新川・新道・新村・新池堤・沼・新開地・野山藪・新宿町・新井手の十項目についてチェックした。今回は領主とその所領高の区分が削除されたので、国境と郡境だけで境界づけられた国絵図となった。郡境ははっきりと墨で引き、郡別に色分けし、村高は村形のなかに記し、1里6寸に里数の黒星をいれた。国境は人吉藩、薩摩藩絵図役人、竹田藩絵図役人と打ち合わせて涯絵図を確認し、この下絵図を江戸に持参、清書は幕府御絵図方役人のすすめによって御用絵師狩野良信に依頼した。幅3間(5,94メートル)長さ3間1尺余(6,13メートル)。全国の国絵図が同じ規格で描かれた。

3. 元禄国絵図関連資料

整理番号 8.4.71 丁3~丁4

元禄国絵図を作成する際に、幕府から貸渡された古絵図を郡単位に分割したが、その際、郡境の島などはどの絵図に書き残していたかを書き留め、のち一枚にまとめる時の参考にした。本図は八代郡築島沖18町が天草郡との境であることを記し、天草郡から出役した役人に確認するために写したとの注がある。

4. 御国絵図御改付而覚帳

整理番号 14.19.11

元禄国絵図の作成についての関連事項を集めた一件史料である。発端は元禄10年閏2月4日評定所に藩士一人出頭するよう命ぜられ、老中列座の席上先年差出の国絵図の改訂を申し渡されたことに始まる。球磨・天草についてはそれぞれ資料を提供してもらって熊本藩が肥後図を担当することになった。それから正保国絵図と現実の変化を調査して、元禄14年4月朔日から清書に取りかかり8月12日出来上がって評定所へ提出された。

5. 西岡御領知図

整理番号 神四五番四五印又七番

山城国西岡一帯は古くから細川氏と関係が強かったが、細川藤孝は元亀二年十月十四日桂川より西在々所々の人夫を徴して勝龍寺城を普請し、ついで元亀四年(1573)信長から桂川西の地(西岡)一職支配権を与えられてこの地の土豪を支配し、長岡京の旧地名にちなんで氏を長岡と改めたのである。細川氏はここを出発点にして近世大名への道を歩き始めた。

6. 青龍寺御城之図

整理番号 廿三印又五番

細川藤孝は天正8年(1580)まで青龍寺城にあって織田信長の武将としての地位を確立した。細川氏のもとには幕府の奉公衆があつまり、松井康之・米田求政を始め志水・荒川・三淵・沼田氏らがつかえていた。青龍寺城には本丸を取り囲むように沼田丸(沼田氏は藤孝の室麿香の実家)と沼田・松井・米田・中村・築山屋敷が配置されて重臣の地位を示し、郭のそとには神足屋敷と侍屋敷が配置されて城下町を形成している様子を伺うことができる。

7. 田辺御籠城図

整理番号 四五印廿七番二折ノ内

細川藤孝・忠興父子は天正8年丹後国を与えられ、宮津城を忠興の居城、田辺城を藤孝(幽斎)の隠居城とし、在々の城に重臣を配置した。慶長5年(1600)7月関ヶ原の戦いに際して石田三成軍が丹後を攻めたとき、幽斎は2ヶ月にわたって田辺城に籠城した。幽斎の死によって当代一級の文学の滅びるのを惜しんだ後陽成天皇や皇弟智仁親王は勅使を送って開城・休戦を両軍に勧告し、幽斎は三度勅命を受けて開城した。舞鶴駅にほど近い田辺城はこじんまりとした城であるが、蟻の這い出る間もないほど厳しく取り囲まれている様がよく示されている。

8. 小倉御城図

整理番号 神四五番四五印又六番二折ノウチ

関ヶ原役後慶長5年(1600)11月2日細川忠興は豊前一国と豊後の内国東・速見二郡30万石を与えられた。はじめ中津城に入ったが、慶長7年(1602)小倉城を築いて居城とし、中津城には世子忠利が入った。小倉城は本州と九州を結ぶ交通の要所にあり、長崎街道の押さえであった。本図は寛永2年(1625)8月20日の図で、10ヶ所の石垣崩れ、樋の口崩れを書き上げている。幕府に石垣の修理を申請したものであろう。「豊前小倉御城之絵図本書虫喰候付安永四年三月写之置也」とある。

9. 熊府之図

整理番号 8.4.93丙

熊本城下町の絵図は数多くあるが、本図はもっともコンパクトな絵図である。大津口の模様を見ると、明和・寛政期か、侍屋敷は苗字で表示し、黒く塗りつぶした町方は通りに町名を表示して対称的である。

10. 有馬城攻図

整理番号 神四五番四五印六十五番

有馬とは肥前国有馬村のことである。キリシタン大名有馬晴信の故城で一般的には原城と言ったほうが通りがいい、有馬氏が日向延岡に移ったあと、元和2年島原に入った松倉氏は新しく島原城を築いて居城とし、厳しくキリシタンを弾圧したので、寛永14年(1637)島原と天草で一揆が発生、11月23日両勢力3万7000人は天草四郎を大将として原城に籠り、老中松平信綱ひきいる九州諸大名の連合軍15万を相手に4ヶ月にわたって抵抗したが、15年2月27日の総攻撃に破れた。原城を取り巻く諸大名軍の配置がよくわかる絵図である。

11. 豊臣太閤伏見御在城図

整理番号 8.4.24丙

伏見城が取り壊された跡に描かれたもので「寛保元年辛歳初夏下浣日寛政十年孟冬於草津駅写之」とある。伏見城は描かれていないが、諸大名の屋敷と町の様子がわかる。細川越中守は最上町最上屋敷のとなりであり、加藤清正は肥後橋を渡った東院南町にあった。

12. 大阪夏陣図

整理番号 神四五番廿三印廿五

関ヶ原役ののち淀君と秀頼は大坂城を居城として動かず、慶長19年(1614)豊臣氏の勢力を排除しようとする徳川家康と対決した。大坂の陣では大名はすべて徳川方に属し、大坂城には真田幸村・木村重成をはじめとする浪人が加担した。夏の陣は元和元年(1615)5月始まり、徳川方の圧倒的な勝利のうちに終わり、大坂城は落城し、淀君・秀頼母子は自刃して豊臣氏は滅亡した。細川氏は4月19日出陣を命ぜられ、28日忠興は水路東上し、忠利は1万人を率いて陸路東上したが、大坂に到着しないうちに落城したので、途中から兵を返し自分だけ大坂に向かった。

13. 相州御備場絵図

整理番号 8.4.75丙

嘉永6年(1853)6月アメリカ使節ペリーが浦賀に来船したので、幕府は本藩に本牧の固めを命じた。このときは黒船がまもなく退去したので撤兵した。11月に本藩は相模沿岸警備の命を受け、番頭長岡詮太郎等が熊本を出発し、12月には長岡監物が相州警備総帥として熊本を出た。安政元年4月经費として相州三浦郡17村、鎌倉郡21村、久良岐郡4村など相武二国の14300石を支給された。本図は安政2年2月白金邸において寺沢範保が描いたもの。

14. 肥後国熊本城絵図

整理番号 8.4.74丙

諸藩の城を修理する場合は幕府に届け出なければならなかった。この絵図は享保7年(1722)5月27日熊本城外曲輪の堀が埋まったものを元のように浚えることを願い出たものである。この時新町1丁目御門外堀2ヶ所、坪井方面13ヶ所の浚え方について幕府の許可があった。

15. 論所の絵図(久住)

整理番号 8.4.29丁

貞享4年(1687)阿蘇郡久住手永波野の内滝水村と竹田領下滝水村の境目争いが生じ、元禄2年(1689)まで紛争が続いた。

16. 小国之内倒木有之所々絵図

整理番号 101-47

貞享3年(1686)阿蘇郡小国赤馬場村の内白川村の奥山に倒れ槻木があり、これを巡って隣領豊後玖珠郡湯坪村(松平大和守領分)との間に国境論争が生じた。元禄7年8月鶴崎での会議で解決した。

17. 五反田縄手四枝道絵図

整理番号 8.4.85丁3

寛文13年(1676)閏6月玉名郡本井手村と三池領筑後国臼井村御境目にある五反田縄手付近の河原に臼井村から開地を作ったため紛争が生じ貞享4年(1687)まで続いた。

18. 野津原五ヶ瀬村山境従前々之絵図

整理番号 辰十三印

元禄15年(1702)2月公領塩手村の百姓が前々から論所となっていた熊本藩領五ヶ瀬村境の入り合い地の萱草を切り、道を作ったことから境界争いとなり、元禄17年まで紛争が続いた。

19. 天草海辺絵図

整理番号 8.4.92丙

江戸後期天草を中心とした有明海・不知火海の航路を描いた絵図である。長崎から各地へ向かって航路が開かれていることがわかる。

20. 大川筋絵図

整理番号 8.4.66丙

菊地川の秋丸村・高瀬町から下流の河川改修の参考絵図と思われる。川の状態、中洲の砂の有様、川幅を広める箇所、堤防の手入れの箇所、費地になる田畑、新塘築造の箇所などを絵図面に落としている。河野八兵衛の署名がある。

21. 御巡見御道筋絵図

整理番号 101の70

江戸時代将軍の代替り時に諸国を視察する巡見使が派遣された。巡見使の通る道順は宿泊、休憩、水呑場まであらかじめ決定されており、準備万端ととっていた。これは延享3年(1746)7月の巡見使に関するものである。一行は7月16日筑後三池から岩本口を肥後にはいり、芦北郡告口から人吉領に抜け、8月20日阿蘇郡岩神口から再入国して阿蘇郡を経て南関に抜けている。この絵図は「延享3年6月仕立ての事」とあるので、巡見使の到来に備えて作成されたことがわかる。

22. 御尋付而御答之書付

整理番号 8.1.25

延享3年巡見使の道筋案内役人等はあらかじめ質問に答えるための模範解答を準備して対応に備えた。

23. 御鷹場総絵図

整理番号 8.4.14丁

藩主の放鷹場、朱線は鷹場の範囲を示し、円形の黒点は境界の傍示杭である。海岸は玉名郡横島から宇土郡三角まで、内陸部は川尻、隈庄、立田山、徳王、小萩山、を結ぶ線の内側はすべて御鷹場であった。画図湖・白川・緑川・龍田山など鳥獣のいるところはすべて御鷹場に含まれている。

24. 御侍山総絵図

整理番号 14.23.3、101の73

侍山とは櫓を植えつけた侍仕立ての櫓場のことであり、櫓山といった。中央を薩摩街道が南北に縦断している。櫓山と田畑との境は傍示杭で示している。薩摩街道24里木のあたり水俣付近にあった、櫓山の中央に侍村、御用宅があり、荒田や水俣郷など周囲の櫓場の小字の分布を描く。それぞれの小字ごとに櫓場絵図が仕立てられている。

25. 肥前国島原津波之絵図

整理番号 8.4.11の1丙

寛政4年(1792)4月1日肥前国島原の雲仙岳の眉山大爆発によって、有明海に大津波が発生した。島原地方も大被害を被ったが、対岸の天草・肥後沿岸一帯に溺死者5520人・家屋の流失2250戸その他甚大な被害をもたらした俗に「島原大変」といわれた。この絵図は眉山の爆発前と爆発後の二枚の絵によって島原地方の変化を描いたものである。